【郷土史への扉】

霧島錦江湾国立公園誕生記念
錦江湾奥の地形と歴史

先月号では、霧島錦江湾国立公園の誕生を記念して、霧島や錦江湾（鹿児島湾）の成り立ちについて述べました。今回は錦江湾奥の地形と歴史につて紹介したいと思います。

錦江湾は、薩摩半島と大隅半島に挟まれ、南北八十キロ、東西二十キロほどの細長い湾で、湾内には複数のカルデラ（姶良・若尊・阿多）が存在しており、世界でも極めて珍しい湾となっています。

若尊カルデラ

錦江湾奥の福山沖には、若尊カルデラと呼ばれている海底火山があります。火山噴火予知連絡会は、平成十五年一月、日本の活火山に関する再検討の中で、若尊カルデラを新たに活火山リストに追加しました。

ここでは、火山性のガス噴気や熱水の噴出がみられ、地元の漁民の間では海がたぎっているように見えることから「たぎり」と呼ばれています。たぎりは若尊カルデラが現在も活発に活動している証拠でもあります。

福山町上空から錦江湾を望む

若尊カルデラの近く、現在の国分と福山の間には若尊鼻と呼ばれる岬があります。この「若尊」の名の由来はどこからきているのでしょうか。それはこの地に伝わる伝説に関係がありました。神武天皇が当地から大和の地まで平定して服従させていく「神武天皇東征」はこの岬の千畳岩から船出したという伝説と、第十二代景行天皇の息子である日本武尊がクマソの族長川上梟師を討伐するためにこの岬に上陸したという伝説。二人の若い尊が船出・上陸したという伝説から、「若尊岬・若尊鼻」と呼ばれるようになったといわれています。

大穴持神社と神造島

大穴持神社は、※式内社で大隅五社の一つに数えられ、国道十号沿いの国分広瀬にあります。

続日本紀の天平宝字八（七六四）年十二月の記事に「噴火により三つの島ができた」とあり、宝亀九（七七八）年十二月の記事に「神造島に大穴持神を祀った」とあります。大穴持神は大己貴神の変化したものであり、土地を支配する神、すなわち噴火と結びつく大己貴神の怒りを鎮めるために大穴持神社を造営したものと思われます。

江戸時代に編さんされた「麑藩名勝考」「三国名勝図会」「地理纂考」などによると、『大穴持神社は、はじめ午（南）の方向八町（約九百メートル）の沖合の「宮洲」にあったが、その島が水没したので現在地に移ったという』の記事が書かれていることやその後の調査結果で、続日本紀に出てくる神造島と現在隼人沖にある神造島は別のものである可能性が高いようです。いずれにしても奈良時代、桜島や開聞岳の火山活動が活発であったことは確かであり、自然の脅威から神仏にすがる当時の人々を垣間見ることができます。

霧島や錦江湾の雄大な自然や地形は、大規模な火山活動とその後の自然浄化作用によって変遷してきました。今は、山や河川、海へと行楽シーズン真っただ中です。霧島の自然や歴史を大いに満喫していただければと思います。

（文責＝鈴）

※延喜式神名帳に記載されている神社で由緒ある有力な神社。延長五（九二七）年完成。

「霧島市の石仏」ガイドブック完成

平成22年度から23年度にかけて調査した市内のさまざまな石仏を掲載しました。

- **販売価格**＝500円
- **販売場所**＝教育委員会文化振興課、国分教育総務課、教育委員会各出張所、国分郷土館、隼人歴史民俗資料館、隼人塚史跡館

問＝文化振興課☎(42)1119